

2018年10月5日

九州から日本を動かす! Move Japan forward from 九州! (63)

農産物を輸出していく中で大変気になるのは、苺の「あまおう」など大きな人気商品です。桃も日本の味は世界一だと思います。海外の生産者がこの苗を自国に持ち帰り、勝手に生産を始めるという流れをどう止めるかが課題です。和牛が良い例で、オーストラリア産の「和牛」が今や世界に広がっています。佐賀牛や宮崎牛、鹿児島牛の方が格段に味が良いにもかかわらず、豪州産の和牛が海外では大手を振って流通しています。

野菜、果物はこのような事態をいかにして避けられるでしょうか？苗を持って行かれたら、日本産とかなり質の近いものが割と短期間で作られ、販売されると思います。味はチョット落ちて、「あまおう」という苺がアジアから出荷され始めることになるのではないかと心配しています。そのうちに味も見かけも段々と向上させてくるでしょう。このような危機を、さて、いかに防衛するのか？

オランダはチューリップ生産国のイメージですが、パプリカやトマトの生産も大きな産業になっているようです。その背景には、知的財産をしっかりと確保していることで、オランダ原産のこれらの農産物の種を購入している近隣諸国から、毎年この権利収入がたくさん入ってきている事実があると聞きます。このような対応策を民間が考え提案していき、行政も支援することで解決できないものかと思いますが、多分かなり難しいのではないかと想像します。

もう一つの手段は、日本人の元気の良い青年たちが海外で野菜、果物、花卉を生産しないかということです。耕作地も狭く労働者も不足している日本国内ではなく、コストも安く、耕作地・労働者ともに豊富な海外に出ていくという判断です。アジアの中でも、日本の技術を学びたい、あるいは、技術を学ぶ為に日本に農業人材を派遣しても良いですよという考えを持った国はいくつかあると思います。そのような考えをもった国に日本の若者が出ていき、良い条件で広大な土地と安いコスト、そして豊富な労働者を使って農産物を生産していく。日本人が作った野菜、果物、花卉ですので人気も出るのではないのでしょうか。それらを日本や近隣諸国に輸出したり、あるいは自国内での消費向けにします。そうすることで、日本国内の労働者不足も解決できるし、日本の農業技術を伝授することでしっかりと異国の地で信頼と期待を勝ち取ることができ、我

が国としても非常に重要な国際貢献となります。また、日本の農業にとっても、この進出した国から労働力を提供してもらうことも可能になるのではないのでしょうか。すばらしい挑戦だと思います。

麻生 泰